
希釈峡

あずまや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希釈峽

【Nコード】

N6804F

【作者名】

あずまや

【あらすじ】

久蔵は居眠りしている仙人から不老不死の妙薬を盗み出したのだが、そのまま使えば毒らしいと知り、川の水で薄めようとするも、これが瓦のように固まっていてどうにもならない。そこへ道に迷ったという美しい女がやってきて、なんでも薄める不思議な谷の水のことを教える。久蔵は喜びいさんでそこへ向かうのだが……。

昔、備後の国の山奥に久蔵という木こりが住んでいた。久蔵は口数の少ない男であつたが、仕事を怠けたことはなく、村での評判は悪くはなかつた。ただこの男は、体のどこかがちよつとも痛いと言ひ山に向かうの町医者のところまではるばる行つて、明日にも死ぬのではと大騒ぎするのだった。久蔵の血筋は先祖代々、五十路に足を踏み入れたことがない。男はちよつと四十になつた朝から、そのことをずっと気に病んでいた。

その日も町医者は少し脈を診ただけで、後がつかえているからと久蔵を追い払つてしまつた。

石畳の険しい山道が果てるところ、町と村の境に『鬼投岩』おになげいわと呼ばれる平たい大岩がある。鬱蒼とした木々の中にあつてその岩の周りだけはなぜか山肌が禿げ上がつていて、見晴らしがよかつた。久蔵はその平岩の上で昼寝するのが常だつたのだが、今日は先客があつた。

老人はまるでこの世のものとは思えぬ奇つ怪な旅装束を身につけていた。

背中に冷たいものがはしつた。なにしろこの真つ昼間に、衣の柄だけが星のまたたく夜空なのだ。この老人、噂に聞く『慧仙』すいせんにちがいない。

空から降つてきた石を不思議な水に溶かして不老長寿の妙薬を作り、慧仙は千年、あるいは二千年生きているともいわれている。

慧仙らしき老人は今、平岩の上で昼寝をしている。その傍らには小鍋ほどの大きさの壺があつた。

あれはもしかや……。久蔵の心の中から煙がどろりと上つた。

抜き足……。差し足……。岩に近づくと、さつと壺を手にして山を駆け下りた。

それから何日かは慧仙の仕返しを恐れ、廃寺の本堂に隠れてすこ

した。暖かな春の日が続いた。そこには猪一匹、訪ねてはこなかった。

慧仙は諦めたにちがいない。暗がりにはいた久蔵は草深い庭へ出ると、盗んだ壺のふたをついに開けた。粉なのか練りなのか、どんな色形の薬が入っているのかと中をのぞくと、ひからびた獣糞のような、茶色いものが底にこびりついているだけだった。臭いはまったくなかった。とりあえずなめてみるかと、指を突っこんでほじり出そうとしても、茶色いものは瓦のように硬く、どんなに爪でかいても耳垢ほどの屑も取れなかった。お堂の太い柱に叩きつけて中身だけいただこうとしても壺は割れず、腐った柱のほうが先に折れてしまった。

あかがねくろがね
銅や鉄には見えないが……。いったい何でできているのかと、壺をまわして調べていると、底になにか彫つてあるのが目に入った。読むとそれは妙薬の能書きだった。

『このままでは毒にしかならぬ。薄めて使うべし』

そこで近くの川へ行き、壺の中に少しずつ水を注いでいった。少しは薄まったであろうかと壺を傾けてみると、出てきたのは入れたばかりの冷たい水だった。

久蔵は人並みには根気のある男だった。壺に水を満たして三日待った。やはり水だった。十日待った。水は水だった。湯を入れた。酒を入れた。酢を入れた。妙薬の塊は泡あぶく一つ出さなかった。

それから家に帰り、もうたくさんだと酒に浸っていると、日が落ちてすっかり暗くなった頃になって一人の美しい女が訪ねてきた。

「使いの途中で道に迷ってしまった。一晩、夜露をしのがせてはもらえまいか」

孤独な男は一も二もなく女を招き入れた。聞けば、女はこの辺りを治める名士の末娘だとか。はじめは疑ったものの、二三の息差しでそれが偽りでないことを察した。男の荒すさぶ下心はあっけなく潰えた……かに見えた。

囲炉裏で鍋をつついていると、女はふと壁ぎわに転がっている壺

に目をやった。

妙薬のことはすっかり諦めていた久蔵は、『拾った』壺のことを、どうせ信じるわけではないと、べらべら口にした。

女は静かに耳を傾けていた。男が話を終えると、ためらいがちにこう言った。

「東の山を五つ越えた先に、『希釈峽』^{きしやくきょう}という険しい谷があります。そこを流れる水は、この世のどんなものでも薄めてしまう不思議な力があるそうで、万一そこに刀を落としたときは、それがどれほどの業物^{わざもの}であっても諦めるしかない、家臣の者が話しているのを耳にしたことがあります」

次の朝、目覚めてみると女の姿はどこにもなかった。

久蔵はかまわず身支度を整え、東の山へ向かった。山で育ったこの男は、坂を歩くことにかけては疲れを知らず、御来光を二度おがんだだけで、女の言っていた通りの谷にたどり着いた。

崖も水量^{みずかさ}もまずまずの荒さではあるが、腕つぶしに覚えのある男なら下っていけぬこともない。この国の山奥にはありふれた深みだった。

さてはかつがれたかと訝りながらも、せっかく来たのだからと、川岸の大木にくくりつけた縄を伝って谷底へ下りていった。

久蔵はごつごつした河原に立った。やはりなんのことはない清流だ。美人の話はもう信ずまいと一度は思^{ひとひ}ったものの、人並みには未練がましいところのあるこの男。じつと流れを見つめながら背負ってきた袋からおもむろに妙薬の壺を取りだすと、しぶきのかかる川べりに寄っていくのだった。

するとどうしたとか、辺りにもうもうと乳色の霧がたちこめ、岩壁も木々も空も、なにも見えなくなってしまった。

久蔵はぎつと歯を剥きだした。驚き恐れたのではない。箍^{たが}の外れた喜びのせいで、つまらぬヘマをせぬよう、己に言い聞かせていたのだ。

男はじゃぶじゃぶと進んで、大きな平岩の上をすべりゆく透き通ったものを壺の中の塊にふくませた。手を突っこんでよくかきまぜ、冷たいものをすくってみると……やはりただの水だった。

怒った久蔵は、流れの中にどぼんと壺を投げ捨てた。こんなことなら欲など出さず、家で酒でも飲んでいたほうがましだった。さつさと帰っていつもの仕事に戻らねば、老いだの病いだのという前に、飢え果ててしまうではないか。

久蔵はじゃぶじゃぶと返して河原に出た。辺りはまだ霧の中。晴れるまで待つしかない、乾いた石の上に腰を下ろしたときだった。男は両足をもがれた落武者のような叫びをあげた。いや本当のところ、足首から先がなかったのだ。

少しして落ち着いてみると、足の痛みは幻であることがわかった。ほつとするのもつかの間、男は足の応えが一切なくなっていることに気づき、ぞつとした。例の女の顔が頭に浮かんた。彼奴かやつ、たしかこんな事を言っではいなかったか。

『そこを流れる水は、この世のどんなものでも薄めてしまう……』しばらくして霧は晴れた。男は足を失ったせいで、その場から離れることができない。ましてや崖をよじ登り、何里も離れた村落まで救いを求めに行くなど叶わぬ夢。男は川の水をかきまぜたせいで、利き手の力も失っていたのだった。

なによりも体の苦しみ痛みを恐れていた久蔵は、こんな寂しいところで一人朽ち果ててしまふくらいなら、川に身を投げてしまった。

男の体は溺れるよりも早くたちまち希釈しせつまっけていき、やがて川の水となり海の水となり、天地をめぐる常久とこしえとなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6804f/>

希釈峽

2010年10月8日15時49分発行